

人と動物の人類学

評・管啓次郎 (詩人・比較文学者)
 明治大学教授

北海道の野付半島で、秋の夕方、一頭の若い鹿に出会った。すすきの生える湿地で丈の低い植物をしきりに食べている。間近から目と目を見交わしてもすぐには逃げない。やが

怪物史や宇宙論も



春風社
2381円

てのんびりと茂みに姿を消していった。帰り道、暗闇の国道244号線で、まちがいなく車との衝突で死んだ大きな牝鹿を見た。外傷はほとんどないが口から血を流している。野生動物との出会いはつねに強い感情を引き起こす。生きた鹿、死んだ鹿。そして出会いがあるたび、動物の命について考える。

この地上では植物が光合成によって太陽エネルギーを変換し動物たちに与えてくれる。動物たちは互いを食い食われながら生命の流動に参加する。人は動物の一員でありながら他の動物たちから身を引き離すことで人となった。他の動物たちが身を

捧げてくれたことで人となった。

本書は10篇の人類学的論考を集めている。人と動物、動物と人。この「と」に、「に」「の」「は」「も」「から」を順次代入することを編者は提言する。それで本書の射程がしめされる。扱われるさまざまな事例が興味深い。カナダのカスカヤマレーシアのプナンの人々の動物との関わり。ヨーロッパにおける怪物の歴史や中部アフリカにおける「人間ゴリラ」と「ゴリラ人間」の話。ネパールの生態宇宙論や隠岐島の民間伝承、などなど。考えるヒントにみちた刺激的論考が続く。

現代とは大型野生動物の大絶滅時代だ。それが過剰な個体数を抱えた人という種の経済行動と密接に関わることも疑えない。動物を食い、使い、愛玩し、ただし食われることはない(ほとんど)。ここに潜む気持ちの悪さにとりくむための鍵は、やはりアニミズムという言葉にあるのではないか。ポール・ナダステイが語る畏にかかったウサギのエピソードが妙に残った。そのウサギのあくまでもしずかな目を想像するだけで胸が苦しくなる。だがそれはなぜだろう？

◇おくの・かつみ 1962年生まれ。桜美林大学教授◇やまぐち・みかこ 76年生まれ◇こんどう・しあき 86年生まれ。

「談」は、「中途半端なもの」としつつ、だからこそ面白いという。立場が異なる相手とも「共通項」を探りあう知的な会話のやりとりが、すがすがしい。(東京書籍、1400円)

『中途半端もありがたい 玄侑宗久対談集』 僧侶の芥川賞作家が、五木寛之、山田太一、佐藤優ら10人と対談。事前に準備をしすぎても、しなさすぎてもつまらなくなる「対

携帯電話で読み取ると、来週の書評本が見られます。明日かオライオンでも紹介し



2012
11/08
読書朝刊